Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 32　2019 秋　（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷2-20-7　tel. 03-3814-0131　www.msz.co.jp

アナ・チン『マツタケ』

プロローグ 秋の香 より

（赤嶺 淳 訳）

高松のこの峯も狭に笠立てて
　盈ち盛りたる秋の香のよさ
　――読み人知らず『万葉集』

突如として世界が崩壊したら、どうするか？　わたしなら森に散歩に出かけるにちがいない。運がよければ、キノコを見つけることができるはずだ。キノコは自分らしさへと、わたしを引きもどしてくれる。花のような、豊かな色や香りを持っているわけではない。だが、キノコの、突然、思いがけないところにひょっこりと出現している様が心地よいのだ。というのも、たまたまそこにいたという幸運に気づかせてくれるからだ。そんなとき、先が見通せない不確定な状態という恐怖のまっただなかにあっても、喜びが存在していることを実感できるというものだ。

もちろん、恐怖は存在している。しかし、それはわたしだけに向けられたものではない。世界の気候は混乱しつつある。工業の進展は一〇〇年前の人びとが想像したレベルよりも、地球上の生命にとっては致命的となっている。もはや経済は成長の源でも、楽観の源でもない。つぎに経済危機がおこったならば、わたしたちの仕事など、どれもが消失してしまいかねない。ただ単にあらたな大災害を恐れているのではない。わたしたちは拠るべきものを持ちえていないのだ。わたしたちは、いったい全体、どこへ向かおうとしているのか、そして、それは何故なのかを教えてくれる、拠るべきよすがを持ちえていないのだ。不安定であること（プレカリティ）は、かつては、より不運な人びとだけの運命のように思われた。しかし、いまやわたしたちの生活は、すべてが不安定である――たとえ、いっとき私腹を肥やしたとしても、不安定な状態にあることにはかわりない。二〇世紀中葉、北側諸国（グローバル・ノース）の詩人や哲学者たちは、安定が保障されている状況に閉塞感を感じ、いらだってさえいたものだ。しかし、いまや当時とは対照的に、わたしたちの多くは、北の人も南の人も、終わりのない困難な状況に直面している。

この本はキノコをめぐる旅についての物語である。その旅とは、不確定性と不安定性のあり様、つまり、安泰という保証がない生について探究するものだ。一九九一年にソ連が崩壊したとき、突然、国家からの保障を失った何千ものシベリア人たちが森に押しかけ、キノコを狩ったという記事を読んだことがある。それらのキノコは、わたしが追いもとめているものではない。だが、そうしたキノコも、わたしが云わんとする要点をついてはいる。人間が発生を操作することができないキノコの生命は、わたしたちが所与のものと考えていた社会が崩壊したときには、恵みであり、拠りどころともなる。

キノコを贈ることはできないが、わたしと旅をともにし、冒頭の短歌が愛でるような秋の香を味わってもらいたい。これこそがマツタケの香りである。マツタケとは日本で珍重されている野生キノコの一種である。その香りは夏特有の、お気楽な豊かさを失った悲哀を喚起する。しかし、同時にそれは、秋の、繊細でいて強烈な、昂ぶった感性をも呼び覚ます。グローバルに進行している放埒な夏の終わりには、そうした感性が必要となる。秋の香りは、保証のない、ありふれた生活に導いてくれる。本書は、二〇世紀的な安定についての見通しのもとに近代化と進歩を語ろうとする夢を批判するものではない。これらの夢については、すでに多数の識者が分析してきたはずだ。そうではなく、拠りどころを持たずに生きるという想像力に富んだ挑戦に取りくんでみたい。その拠りどころとは、かつてみなに、自分たちがいったいどこへ向かおうとしているのか知っていると思わせてきたものである。もし、わたしたちがそうした菌としてのマツタケの魅力に心を開くならば、マツタケはわたしたちの好奇心をくすぐってくれるはずだ。その好奇心とは、不安定な時代を、ともに生き残ろうとするとき、最初に必要とされるものである。

この挑戦を過激なスローガンにするとこうなる。

多くの人は不安にかられ、世界は「救」われないという単純な認識を直視しようとしない。……もし、将来グローバル革命がおこると信じないならば、わたしたちは、（これまでどおり）いまを生きていくしかない。

（「プロローグ」の冒頭より転載いたしました）

とらえどころのない生命、オレゴン。かつて産業林だったところにマツタケ・キャンプが出現した。（本書より）

マルチスピーシーズ民族誌の鮮やかな成果

アナ・チン
《マツタケ　不確定な時代を生きる術》
赤嶺 淳 訳

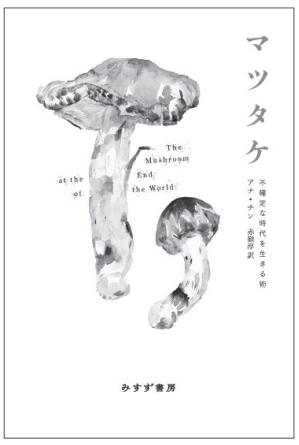
本書は、カリフォルニア大学サンタクルス校で文化人類学を教えるアナ・チン教授の三冊目の本である。二〇一五年に刊行されるや話題をよび、二〇一六年度の米国文化人類学会賞（グレゴリー・ベイトソン賞）、人間性人類学会の民族誌部門でヴィクター・ターナー賞を受賞するなど、数々の賞を独占した。マツタケをアクターとして、人間と人間以外のものの関係性、種間の絡まりあいをつぶさに論じたマルチスピーシーズ民族誌の成果である。

「この本はキノコをめぐる旅についての物語である」。著者は、日本（京都・中部地方）・アメリカ（オレゴン州）・中国（雲南地方）・フィンランドなどに共同研究者とともにおもむき、生態学者、菌学者、商売人・採取人を含むマツタケ関係者など多様な人々と現場を歩き、議論を重ねてゆく。人やものとの関わりあい――予期せぬ出会いもたくさんあった――を通して、マツタケの発生から採取、売買・貿易、日本人の食に供されるまでの過程に、著者は多くを観察し、学んでゆく。

森林伐採、景観破壊、戦争による東南アジア難民、里山再生、コモディティ・チェーンやサルベージを通じた蓄積など、資本主義がもたらした瓦解からいかに非資本主義的様式が生まれ、両者が絡みあいながら、人間と人間以外のものが種を超えて共生しつつ世界を制作しているのか。

コモンズの可能性や学問研究のあり方、共同研究の可能性までを射程に入れ、人間中心主義を相対化した、鮮やかな人類学の書であり、今後の人文・社会科学の方向性をしるす書である。「進歩という概念にかわって目を向けるべきは、マツタケ狩りではなかろうか」。

［人類学・現代思想］【十七日刊】
（四六判・488頁・四五〇〇円）



▽本紙『パブリッシャーズ・レビュー みすず書房の本棚』は、年四回発行です。**PDFにてダウンロード**可能になりました。みすず書房ウェブサイトよりどうぞ https://www.msz.co.jp/misuzu/publishers_review/

『憎しみに抗って』に続く邦訳第2弾

カロリン・エムケ
≪なぜならそれは言葉にできるから
証言することと正義について≫
浅井晶子訳

暴力をうけた人は、それを話すことができるだろうか。周囲の人はそれを聞くことができるだろうか。

人は想像を超えた暴力を受けると、それを自分のなかで受け入れることはできないし、何が起こったのか認識するのにとても時間がかかる。暴力を受けた人の話を聞いた人も、その体験をすぐに理解することができない。

けれども、暴力は世界中で蔓延し、ある日突然被害者になる人は増え続けている。私たちはそれをどのように受け止めることができるだろうか。

タイトルは、「あなたは〝それ〟を書けるの？」、と著者にある女性が問いかけた言葉からきている。

著者エムケはドイツのジャーナリスト。戦場や収容所を取材し、そこでの人々との出会いから、「語ること」「聞くこと」「聞いたことを伝えること」について考察する。

被害者に語ることを強いるのではなく、語れないものだと一歩引くのでもなく、「それでもなお語る」こと。そのためにできることを探っていく。

出会った人々の言葉とともに、旅する著者の生活や思い出にまつわる個人的なエピソードが、普遍的な考察へとつながっていく。温かく深みのあるエッセイ。

［思想・社会］【十月中旬刊】（四六判288頁・予三六〇〇円）

▼著者既刊『**憎しみに抗って**』浅井晶子訳（三六〇〇円）

自己責任論を乗り越える道筋

ヤシャ・モンク
那須耕介・栗村亜寿香訳
≪責任の時代≫

自己責任論が広まって久しい。一方これに違和感を抱く側は、運や不平等など当人の力の及ばない要因を挙げて責任の否定を試みてきた。

しかし「責任」は戦後長らく、自助ではなく人助けの義務の意味で使われてきた。それが「当然の報いは受けよ」という懲罰的な自己責任論に転換したのは、比較的最近だ。社会福祉を縮減したい右派が始めたこの主張は、皮肉にも左派の反論の前提にもなっており、議論は混迷。その間、感情に訴える自己責任論の一人勝ちを許している。

本書は、一見説得的に見える自己責任論の欺瞞を明らかにし、責任否定論の欠陥をも指摘して、責任概念の再構築を目指す。注目の政治学者が自己責任論を乗り越える道筋を示した快著。

［政治哲学］【十月中旬刊】（四六判288頁・予三七〇〇円）

グローバルに取材、多方面から分析

A・ローリー
上原裕美子訳
≪みんなにお金を配ったら
ベーシックインカムは世界でどう議論されているのか？≫

シリコンバレー、インドの貧しい結婚式、ホームレスのシェルター、さらに議員のオフィスまで、グローバルな取材でユニバーサル・ベーシックインカムの現状を研究報告。「好むにせよ嫌うにせよ、UBIは21世紀最大の社会政策アイデアだ…本書はUBI経験についての最良の研究だ」ローレンス・サマーズ（ハーヴァード大学教授）。「この数年ほど――中間層が縮小し、政府に対する信頼が薄れ、技術進歩が急速に進み、経済全体がウーバー化し、貧困対策として現金に注目した研究が多数登場している昨今――、驚くほどの存在感をもち始めた」政策を、テクノロジー、不平等、ジェンダー、福祉といった多方面から分析。［経済］【十月上旬刊】（四六判256頁・予三〇〇〇円）

コストと便益の両方を見すえて

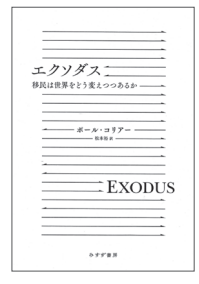
ポール・コリアー
松本裕訳
≪エクソダス　移民は世界をどう変えつつあるか≫

「本書は、もっとも貧しい社会、「最底辺の10億人」に関する私の研究の一環である…欧米諸国の移民政策は不用意で見過ごされがちな影響を彼らにおよぼす…本書はリベラルな人々の主流見解を批判するものでもある…国をまたぐ移住が一般的になり国民的アイデンティティがなくなれば、社会は脱国家的になる。それに問題があるだろうか？

私は大きな問題があると考える…本書の中核を成すメッセージは、「移住が良いか悪か」という質問が間違っているということだ…緩やかな移住は利益をもたらし、大量移住は損失をもたらす。したがって重要なのは「どのくらいが最適か」だ…恥ずべきなのは移住制限の内容が不適切なことだ。転じて、これは真剣な議論を妨げてきたタブーを反映するものでもある。本書は、そのタブーを打ち破ろうとする試みなのだ」（本文より）［経済］

（四六判・296頁・三八〇〇円）

▼著者既刊『**収奪の星**』村井章子訳（三〇〇〇円）



精神病院廃絶、その現場

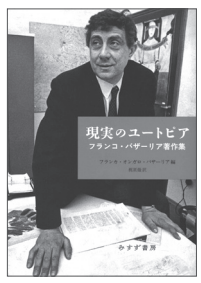
F・O・バザーリア編
梶原徹訳
≪現実のユートピア　フランコ・バザーリア著作集≫

イタリア精神医療改革の父と呼ばれ、公立精神病院の廃絶を定めた「精神保健に関する法律一八〇号」成立の中心人物となった精神科医、フランコ・バザーリア。本書はバザーリアの妻であり、彼の改革運動を支えつづけたフランカ・オンガロによって編まれた著作集である。

本書に収められた一八篇の論考は、バザーリアがいくつもの精神病院での経験、そして反精神医学の思想家たちとの対話から、いかに精神病院の廃絶＝脱施設化の思想へと至ったかを詳らかにする。

精神病院という名の収容所を棄て、地域社会で病める人を支えていくとはどういうことなのか――。今日わが国が直面する課題にも通ずる、精神医療改革の生々しい現場を物語る重要書。

［現代思想・精神医療］（A5判・408頁・七二〇〇円）



介入の歴史、多様な反応

D・アーノルド
見市雅俊訳
≪身体の植民地化　19世紀インドの国家医療と流行病≫

本書はイギリス植民地下のインドにおける疫病対策と医療をテーマに、帝国の支配が現地の人々の「身体」にまで及んだことを論じるものである。天然痘、コレラ、ペストなどの流行病に対する西洋医療の介入の歴史をたどりながら、インド側の多様な反応の実態を明らかにし、その抵抗、順応、参加、取りこみというタマネギ状態の諸相をていねいにめくっていく。さらに、植民地の権力と知という問題だけでなく、インド社会内部の差異、下層民（サバルタン）の政治と中流階級のヘゲモニーといった問題にも踏み込んでいく。その叙述は鮮かで、「植民する側」と「植民される側」の「あらゆる声」を史料から丹念に拾い上げ、植民地時代のインドの病気と医療の壮大なドラマが展開される。

［医療史・思想史］【二十日刊】（A5判・368頁・七六〇〇円）

広大な思想の誕生

C・G・ユング
横山博監訳
大塚紳一郎他訳
≪分析心理学セミナー　1925年、チューリッヒ≫

ユング心理学はいかにして生まれたのか。一九二五年のチューリッヒで、まさにユング心理学が産声をあげた全16回のセミナーの記録である。

患者の治療、ジークムント・フロイトとの交流と決別、その後のユングを襲った心の危機……。『赤の書』に取り組んだ直後のユングによる赤裸々な語りは、『ユング自伝』を彷彿とさせる心理療法家・精神科医の人生の記録であり、ひとつの広大な思想の誕生でもあった。

二〇一二年に新たに校訂が加えられ、セミナー当時の状況がありありとよみがえる、世界的にも有名なユング心理学入門の決定版。シャムダサーニ／マガイアー編。［心理・精神医学］【十月中旬刊】（四六判288頁・予三六〇〇円）

▼著者既刊『**心理療法の実践**』『**ユング　夢分析論**』ともに横山監訳・大塚訳（三四〇〇円）『**ユング自伝**』［全2巻］河合隼雄他訳（各二八〇〇円）

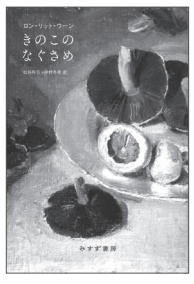
魂の再生の物語

ロン・リット・ウーン
≪きのこのなぐさめ≫
枇谷玲子・中村冬美訳

悲しみの淵から、私を連れ出してくれたのは、きのこだった――。

マレーシア人の著者は、文化人類学を学ぶ交換留学生としてやって来たノルウェーでエイオルフと出会い、恋に落ちた。夫婦となった二人は深く愛し合い、互いに互いを必要としていた。ある朝、いつものように職場に向かったエイオルフが突然倒れ、そのまま帰らぬ人となる。最愛のパートナーを失った著者は、喪失の痛みの最中ふと参加したきのこ講座で、足下に広がるもうひとつの世界、きのこ王国に出会う。きのこたちの生態は不可思議な魅力に満ちていた。苔むす森でのきのこ狩りの効用。きのこ愛好家間の奇妙な友情と不文律。専門家への「通過儀礼」。絶品きのこトガリアミガサタケ。とっておきの、きのこレシピ…。

悲しみの心象風景を彷徨う旅と、神秘に満ちたきのこワンダーランドを巡る旅をつづけ、回復のときを迎える、魂の再生の物語。120種類のきのこが登場。［海外文学］（四六判・328頁・三四〇〇円）



みすず書房新刊
（2019・5～9）

東京・文京・本郷2
TEL03(3814)0131
（価格は税別です）

回想のケンブリッジ
半澤孝麿　長年第一線で真摯に問う政治思想史の視座。学問的自伝の色合いを帯びた美しい回想録の導くモノグラフ集成。**七五〇〇円**

科学者は、なぜ軍事研究に手を染めてはいけないか
池内了　科学者の軍事研究に絞った倫理規範の書。歴史考察から防衛装備庁、大学と科学者コミュニティ、AI兵器まで。**三四〇〇円**

宗教事象事典
アズリア他編　脱宗教化の一方ファンダメンタリズムに揺れる世界――学際・分野横断的〈読む事典〉。**増田・伊達他編訳**　**二〇〇〇〇円**

政治的イコノグラフィーについて
ギンズブルグ　聖性利用の世俗画、戦争ポスター、ゲルニカ。イメージが権力を発揮する方法を明かす歴史学。**上村忠男訳**　**四八〇〇円**

「二つの文化」論争
戦後英国の科学・文学・文化政策
オルトラーノ　文系／理系の区分はじめ、スノー『二つの文化と科学革命』が生んだ波紋を英国中心に追う。**増田珠子訳**　**六二〇〇円**

ズーム・イン・ユニバース
10^{62}倍のスケールをたどる極大から極小への旅
シャーフ　宇宙の観測限界から、素粒子の世界へ。100点以上のイラストで贈る驚異の旅。科学を横断する書。**佐藤やえ訳**　**四〇〇〇円**

明治維新の敗者たち
小栗上野介をめぐる記憶と歴史
ワート　勝てば官軍、負ければ賊軍なのか。小栗上野介を巡る明治～平成の語りに見る、勝者史観への抵抗。**野口良平訳**　**三八〇〇円**

マクヒュー／スラヴニー
現代精神医学
疾患・特質・行動・生活史の四つの観点から障害分類と治療の体系化を試みた、定評あるベーシックテキスト。**澤明監訳**　**七二〇〇円**

ナガサキ　**核戦争後の人生**
サザード　原子雲下の同日同刻から苦難とともに生きのびた長い戦後まで。「このうえない歴史書」（ダワー）。**宇治川康江訳**　**三八〇〇円**

専門知は、もういらないのか
無知礼賛と民主主義
ニコルズ　ファクトではなく感情で物事を判断する。民主主義を蝕む潮流への、一専門家からの愛ある反撃。**高里ひろ訳**　**三四〇〇円**

大学なんか行っても
意味はない？　教育反対の経済学
カプラン　なぜ現在の教育システムが時間と金のムダなのかを経済学の「シグナリング」をキーワードに分析。**月谷真紀訳**　**四六〇〇円**

工場日記
ヴェイユ　工場の苛酷な現実の中に生まれる感情と思考の跡。工場労働についての詳細な校閲を加えた決定版。**冨原眞弓訳**　**四二〇〇円**

ナチス　破壊の経済　［全2巻］
1923-1945
トゥーズ　ナチの経済政策がいかに付け焼刃に過ぎなかったかを圧倒的データと史料で描ききった決定版。**山形浩生他訳**　**各四八〇〇円**

中井久夫集11　2009-2012　［完結］
患者と医師と薬とのヒポクラテス的出会い
「病棟深夜の長い叫び」「統合失調症の有為転変」他。自らの精神医学の実践の軌跡を辿るシリーズ最終巻。**最相葉月解説**　**三六〇〇円**

直観幾何学　［新装版］
ヒルベルト／コーン＝フォッセン　幾何学の美しさと発展と数学内の位置付けを、直観的に理解するために。**芹沢正三訳**　**六二〇〇円**

定義集　［新装版］
アラン　ものとことばと思想の関連を示す二一〇語。経験と思索を独自の言語表現に高めた哲学者による訳業。**森有正訳**　**三二〇〇円**

ケアへのまなざし　［新装版］
神谷美恵子　「たった一人の患者の心でも、ほんとうに知るのはなんとむつかしいことか。」エッセイ、論文、対談他を収録。**三〇〇〇円**

アラン島　［新装版］
シング　アイルランド最果ての島で見たもの、おじいに聞いた妖精譚。苛酷な自然と人間を綴る永遠の紀行文学。**栩木伸明訳**　**三二〇〇円**

死ぬことと生きること　［新装版］
土門拳　戦後日本の矛盾と日本人を凝視した眼を文章に刻む、六五歳の初エッセイ集。その強靭な写真の謎を自ら明かす。**三三〇〇円**

ぼくの美術帖　［新装版］
原田治　古今東西の美をめぐる旅と、民族の縄文的美意識の系譜に迫る日本美術史。アートへの愛が溢れる美術エッセイ。**二七〇〇円**

ホッブズの政治学　［新装版］
シュトラウス　『リヴァイアサン』にいたる思想の生成をたどり、「近代性」下の無意識に迫る透徹の書。**添谷・谷・飯島訳**　**四五〇〇円**

トラウマの医療人類学　［新装版］近日出来
宮地尚子　臨床現場から薬害エイズ、移住者問題、PTSDと法、マイノリティの精神医学まで、精神科医の思考と実践。**四六〇〇円**

「恐竜はどこから来て、どうやって支配者に成り上がったのか。どのようにして巨大化し、あるいは羽毛と翼を発達させて鳥に進化したのか。そして、なぜ鳥以外の恐竜が滅び、その結果として現代の世界にいたる道が拓け、私達人類が誕生することになったのか。そんな壮大な物語を語ろうと思う。」

恐竜たちの一億六〇〇〇万年にわたる歴史の解明。その道のりは、一つ一つの化石の発掘から始まった。古生物学者たちは、化石や産状から、化石の主の姿や生態、当時の環境を分析し、恐竜たちのかつての姿を蘇らせてきた。著者もその一人であり、これまでに15種の新種を記載してきた気鋭の恐竜学者だ。

化石の記録が積み上がると、恐竜というグループが少しずつ見えてくる。たとえば、初期の恐竜の多様性が同時期の「偽鰐類」よりも小さいことからは、初期の恐竜は弱い立場にあったことが明らかになった。

その後、恐竜は、三畳紀末の絶滅事件をきっかけに台頭していく。超大陸パンゲアの分裂により各大陸でさらに多様化し、そして繁栄の絶頂期を迎えた頃、突然、絶滅の日を迎えることになる。

化石発見の興奮を追体験しながら、最新の研究に基づく恐竜史を一望できる「傑作」（ワシントン・ポスト）。中村桂子氏書評（毎日新聞8月18日）ほか反響続々。

気鋭の研究者による“恐竜本の決定版”

（小林快次 北大教授）

スティーブ・ブルサッテ

《恐竜の世界史　負け犬が覇者となり、絶滅するまで》

黒川耕大訳　土屋 健 日本語版監修

［恐竜・古生物学・進化史］（四六判・368頁・三五〇〇円）

超人的先駆者の着眼と構想

アルマン・マリー・ルロワ　森夏樹訳

《アリストテレス　生物学の創造　全2巻》

「どのページも、アリストテレスの眼を通して見たこの世界の美しさを追体験させてくれる」（ネイチャー誌）

アリストテレスは超一級の生物学者だった――しかも、史上一人目の。自身も進化と発生学の研究者である著者がアリストテレスの生物学を調べあげ、二四〇〇年前の超人的先駆者の着眼と構想を掘り起こした。形態、発生、代謝、分類、情報の継承まで――それは古くて新しい、ブリリアントな生物観だ。

本書のどのページもアリストテレスのセンス・オブ・ワンダーと呼ぶべきものに満ちており、哲人を魅了した生物界の不思議さと精妙さに、読む者もまた魅入られてしまう。時代を超えた生物学の精髄を読み解く書。「グールドの最良の著書にも匹敵する才筆。近年の生物系の著作の中では抜きん出て長く読まれる本になるだろう」（ニューサイエンティスト誌）［生物学・哲学］【十七日刊】（四六判・上368頁・下344頁・各三八〇〇円）

何が重要で、臨床とどう関係するか

十川幸司

《フロイディアン・ステップ　分析家の誕生》

精神分析を創始し、20世紀の思想を決定付けたフロイト。だが、フロイトは本当に読まれているだろうか。

読むとは著者とともにテクストを新たに創る、創造的な行為である。本書はまさにそのような意味でフロイトを読む。そして、その思考のエッセンスを浮上させる。

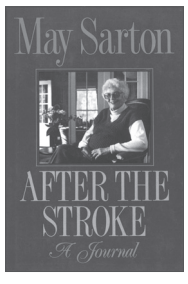
個々の経験から普遍へと開く通路、フロイトが見出したこの通路をいま新たに発見することが、今日ほど必要とされている時代はない。倒錯、ナルシシズム、マゾヒズムなどの概念は、人の心の深部でどのような地図を描くのか。普遍的な形で現れる心の奥底の様相が映し出されていく。フロイトは臨床をどう刷新し分析家としてどんな変容を遂げたか。その思想の核心を明かすフロイト論の決定版。［心理学・現代思想］【十七日刊】（四六判・256頁・三二〇〇円）

脳梗塞から立ちなおる

メイ・サートン　幾島幸子訳

《74歳の日記》

『70歳の日記』のサートンはつねに若々しく、前向きだった。しかし73歳のとき、彼女は軽い脳梗塞を患う。不整脈もつづき、執筆も庭仕事もできない日々が9カ月もつづいた。そんなとき支えになったのは、「とにかく率直な日記をつけよう」と決めてそれを実行したこと。こうして読者は、サートンがついに元気になるまでの道程を伴走することになる。



愛猫のブランブルと愛犬のタマスは死んでしまうが、新たにやってきたヒマラヤンの雄猫ピエロは人懐っこくて暴れん坊。日記の終盤にかけてサートンの「独り居」は、いつしか豊かさと生気をとり戻していく――毎日臨む海、庭の花々、友人達や手紙をくれる読者、ふたたび湧きはじめた詩。このチャーミングな日録を、年齢を意識しはじめるすべての読者へ。［アメリカ文学・エッセイ］【十月中旬刊】（四六判336頁・予三二〇〇円）

月刊雑誌

《みすず》最近号より

松本俊彦「アルファロメオ狂騒曲」／藤山直樹「修業することと生きること」／矢野久美子「自由と政治」／土屋健「機能獲得の進化史　あし」／中村和恵「マヌカン」／小沢信男「短夜や」／池内紀の〈いきもの〉図鑑（七月号）。小沢信男「雲の峰」／酒井啓子「父子鷹」／郷原佳以「「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へ」／五十嵐太郎「変貌する表参道と安藤忠雄」／武田尚子「ナイトウエア全盛期の攻防」／繁内理恵「核戦争を止めた火喰い男と少年の物語」（八月号）。土屋健「機能獲得の進化史　あし」／中村和恵「女友達」（九月号）。（各三〇〇円）

書評コラム

辻山良雄

奥山淳志《庭とエスキース》を読む

この本には、主にふたりの人物（そして犬のさくら）しか登場しない。一人は空知管内新十津川町の小さな丸太小屋で、自給自足の生活を営む「弁造さん」。そしてもう一人は、弁造さんが老いて亡くなるまでの14年間、毎年、季節ごとに弁造さんのもとを訪れ、その姿を写真におさめた、著者の奥山淳志さんだ。

〈自給自足〉と聞くと、気難しい人物を想像されるかもしれないが、この本での弁造さんは、終始おおらかで陽気である。開拓時代を知る弁造さんは、「夜盗虫（よとうむし）」や「スイカ泥棒」に悩まされたときのことを面白おかしく話すが、そうした生き生きとした語りには、読者も思わず引き込まれる。弁造さんの庭は、家を建てるのに十分なカラマツ、転作時期を考慮して栽培される作物など、自給自足を可能にする工夫がある。そして本書に収められた、四季折々の写真のように、北の自然を生かした美しさには、何よりうっとりさせられる。

この本の底には、〈他者〉という簡単にはうかがい知ることのできない、大きな問いがある。弁造さんは自給自足の生活を実践する一方で、若いころに抱いた絵描きへの夢をあきらめきれず、毎晩イーゼルに向かい、主に女性の像を描いている。

弁造さんはなぜ絵を描き続けるのか、そして何を思いながら、ひとり暮らしているのか…。弁造さんは冗談を言ったかと思えば急に真面目な顔になり、容易に自分を見せないが、奥山さんはその人生に近づこうとしながらも、弁造さんの繊細な心情には、あえて触れないようにしている（ように見える）。そうした人のあいだに横たわる、絶対的な距離に誠実に向かい合うことで、他者のわからなさは、この本の持つ深みとなり、作品を余韻あるものにしている。

人生とは、人との出会いである。わたしたちは自分の人生を、自分だけのものだと思いがちだが、そこには常に自らを照らしてくれる他者の存在が含まれる。著者は長い時間をかけた弁造さんとの関わりのなかで、そうした複雑な自画像を完成させた。（つじやま・よしお　本屋「Title」店主）

＊北海道新聞5月19日（日）読書面に掲載の書評を転載

▽**奥山淳志『庭とエスキース』**（三二〇〇円）▽**弁造さんのエスキース展**（企画構成・奥山淳志）全国巡回　名古屋9月16日まで、神戸20―29日、鎌倉10月18日―他

本の魅力を再発見

荒川洋治《霧中の読書》

高い評価と多くの読者に支えられた『忘れられる過去』や『過去をもつ人』などの、「文学は実学である」や「詩と散文のちがい」という荒川洋治の指摘には胸を衝かれ、揺れる社会の中で読書の方位を示されてきた。今もそのありがたみは変わらない。

本書もまた、風景と時間、言葉と文学、新時代の表現など、独自の発見にあふれている。川上未映子の詩、島崎藤村の「新刊」、国語辞典の形態変化、四〇年前の名作文学のテレビドラマから、フォークナー、サローヤン、カルヴィーノまで、新たな息を吹き返す。ぶれない書き手が、世間のことばに耳を澄ましつつ本の魅力を教えてくれる。書き下ろしを含む四六編。［書評・エッセイ・文学］【十月上旬刊】（四六判・232頁・二七〇〇円）

患者と家族と向かい合い、最後の日々をともに過ごす――
小堀鷗一郎医師と在宅医療チームを追うドキュメンタリー

映画　**人生をしまう時間**（とき）　監督・下村幸子

NHK BS 1スペシャル「在宅死 “死に際の医療”200日の記録」は、大きな反響をよび再放送を重ねました。日本医学ジャーナリスト協会賞　映像部門〈大賞〉に輝いたこの作品に、新たなシーンを加え、再編集を施した、待望の映画化です

シアター・イメージフォーラム
（東京・渋谷）今月21日（土）－
ほか全国順次公開 www.jinsei-toki.jp

日本エッセイスト・クラブ賞 受賞、大好評16刷

小堀鷗一郎

死を生きた人びと　訪問診療医と355人の患者

最後の日々をどう生きて、終えるか。その希望はどうすれば叶うのか。患者とともに最期のあり方を模索する、小堀医師の書。2400円

死すべき定め
死にゆく人に何ができるか
ガワンデ　終末期をどう生きるか。現役外科医が描く迫真のドラマ。**原井宏明訳 2800円**

老年という海をゆく
看取り医の回想とこれから
大井 玄　認知症は老耄の現れ。老耄は自然の恵み。生老病死を見つめる人生賛歌。**2700円**

耄碌寸前
森 於菟　解剖雑話から父鷗外の死因まで医学者の極上の随筆21篇。**池内紀 解説 2600円**

中井久夫集［全11巻］
全巻解説　最相葉月
その透徹した知性と柔らかな感性。精神科医・中井久夫の半世紀におよぶ思考と実践の道筋を追う。**各3200-3600円**

独り居の日記
サートン　歳とるほどに輝くアメリカの女性作家58歳の年の記録。**武田尚子訳 3400円**

70歳の日記
サートン「今の私は、生涯でいちばん自分らしい」。濃密な1年。**幾島幸子訳　3400円**

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
www.msz.co.jp　ニュースレター（月2回配信中）　ウェブサイトよりお申し込みください
ツイッター www.twitter.com/misuzu_shobo　インスタグラム www.instagram.com/misuzu_shobo/（価格は税別です）

五感の使い方を再発見

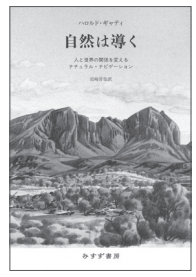
ハロルド・ギャティ
《自然は導く　人と世界の関係を変える ナチュラル・ナビゲーション》
岩崎晋也訳

GPSのない時代に自然物を手掛かりにするナビゲーション技法（ナチュラル・ナビゲーション）を究め、チャールズ・リンドバーグをはじめとする同時代の冒険家たちから「ナビゲーターたちのプリンス」と称えられた達人がいた――この本の著者ハロルド・ギャティ（一九〇三―五七）だ。航空パイオニアとしても実績のある彼が遺したナチュラル・ナビゲーションの入門書を初邦訳。英語圏では一九五八年から愛読され、自然を読む感覚が失われゆく今こそ「時を経るにつれて重みを増す」とも評される書。

自然物に導かれて歩くために必要なのは才能ではなく、誰もが「わずかな練習をするだけで、自然のしるしを道路標識と同じように間違いなく読みとれるようになる」と著者は説く。「まっすぐに歩くには」といった基本から、波のうねりさえも読みとくミクロネシア人の海上ナビゲーションのような驚嘆の技術まで――世界中の自然のしるしが話題にのぼり、それらを巡りながら五感の使い方を再発見させられるよう。

読み終わらないうちから、外に出て自然物との新しい関係を始めたくなる。

［自然・アウトドア］（四六判・290頁・三六〇〇円）



食にみる文化の深遠さ

崔岱遠（さいたいえん）
李楊樺画
川浩二訳
《中国くいしんぼう辞典》

中国は広い。東西南北に風土は異なり、いくつもの民族や文化が混在している。しぜん、飲食の伝統も土地によってさまざまだ。時代が流れ、人びとの身なりや住む家、街のようすはすっかり変わってしまったが、食卓に上る器の中の食べ物だけは、いまなお中国の文明に特有の痕跡をとどめている。

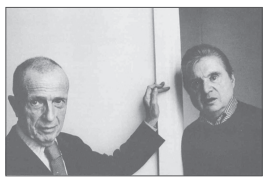
そんな人びとの肺腑に沁みついた味の数々を、「家で落ちついて食べる料理」「街角で気ままに楽しむ料理」「レストランで味わう精緻な料理」に分け、情感ゆたかに描き出す。

味わい深い文章と香ばしいイラストで、中国でおいしいものを追い求める〝吃貨（チーフオ）〟（くいしんぼう）たちの胃袋をとらえた、垂涎必至の絶品エッセイ！［料理・食エッセイ・中国文化］【十月中旬刊】（四六判392頁・予三〇〇〇円）

画家たちとの鏡像関係

千葉文夫《ミシェル・レリスの肖像　マッソン、ジャコメッティ、ピカソ、ベイコン、そしてデュシャンさえも》

ミシェル・レリス（一九〇一―一九九〇）は、シュルレアリスム、民族誌、精神分析、実存主義を生き抜いたフランス屈指の作家である。その遊戯と演戯にみちた生涯と、芸術家たちとの鏡像関係ともいえる深い交流を、レリスがモデルとなった数々の肖像画を分析しつつエレガントに論じる待望の研究エッセー。


ベイコン（右）とレリス

『幻のアフリカ』『ゲームの規則』全四巻など主著の翻訳がそろい、今こそレリスとは何者だったか問う時期が到来している。マッソンと人生の

生誕200年、色褪せぬ名著評伝

原田光子《真実なる女性 クララ・シューマン》

昭和16年秋、一冊の評伝が世に出た。クララ・シューマン――気品ある美しい日本語で書かれたこの本はまたたく間に初版を売り切り、増刷もすぐ書店から消えたという。

非凡な許婚者との恋、音楽的・精神的に豊かにされた夫婦としての日々。メンデルスゾーンやショパン、ブラームスら翼ある人々とロマン派の時代を織りなし、シューマンの没後40年にわたる年月を、彼女はピアノとともに、恵まれた友情とともに生きた。

戦時下の日本人の心を打ち、その後半世紀以上も読み継がれてきた名著評伝、待望の復刻。［伝記・音楽史］（A5判・328頁・五二〇〇円）

古典的名著をいま第一人者の新訳で

レヴィ＝ストロース 序文イザール
渡辺公三・三保元・福田素子訳
《人種と歴史／人種と文化》

〈「人種と歴史」「人種と文化」は今日的意義の照明のもとで一気呵成に読まれるべきではなかろうか〉（序文）。「人種と歴史」は一九五二年、ユネスコの反人種主義キャンペーンのため書かれた。この小著で著者が論じた核心と込めた熱意とを、渡辺公三訳はまっすぐに伝える。自民族中心主義の幻想性を突き徹底した文化相対主義を提示。フランスでは人種差別反対の基本図書として高校教材に使われているという。レヴィ＝ストロース思想全体の理解にも肝要の著。七一年再び文化の多様性を断固擁護した「人種と文化」併収。［国際社会］【十月上旬刊】（四六判152頁・予三六〇〇円）

新装復刊

［10月］

ヴェイユの言葉

日々の思索と実践をとおして思想を熟成させたシモーヌ・ヴェイユ。その言葉を編む。**冨原眞弓編訳 ¥3200**

宗教社会学論選

ヴェーバー『宗教社会学論集』から、その問題設定・研究の意図を論じた章を精選する。**大塚・生松訳 ¥3100**

量子論

ボーム　古典論との関係を説明しつつ、量子論を物理的・数学的に定式化した教科書。**高林武彦他訳 ¥7600**

みすず書房 近刊のお知らせ

11-1月の刊行予定から（書名は仮です）

ホロコーストを語ること
　ダン・ストーン　上村忠男訳
破滅者　トーマス・ベルンハルト　岩下眞好訳
フランクフルト学派のナチ・ドイツ秘密レポート　フランツ・ノイマン他　野口雅弘訳
良き統治　ピエール・ロザンヴァロン　古城他訳　宇野重規解説
アウシュヴィッツ潜入――囚人4859号
　ヴィトルト・ピレツキ　杉浦茂樹訳
悪魔のキッチン　M. P. ホワイト　千葉敏生訳
ボードレールの自己演出　小倉康寛
名もなき主治医　H. J. プリスビロー　小田嶋由美子訳　勝間田敬弘監修
穀物に抗して――初期国家のディープヒストリー　J. C. スコット　立木 勝訳
フロム・ヘル［新装版］
　A. ムーア作　E. キャンベル画　柳下毅一郎訳
（www.msz.co.jp/book/new/ にもご案内）

みすず書房・最近の重版より

ナガサキ――核戦争後の人生 スーザン・サザード　宇治川康江訳	¥3800
死を生きた人びと――訪問診療医と355人の患者 小堀鷗一郎	¥2400
人類の星の時間 シュテファン・ツヴァイク　片山敏彦訳	¥2500
昨日の世界　1 シュテファン・ツヴァイク　原田義人訳	¥3200
子どもたちの階級闘争 ブレイディみかこ	¥2400
ウェルス・マネジャー　富裕層の金庫番 ブルック・ハリントン　庭田よう子訳	¥3800
測りすぎ ジェリー・Z. ミュラー　松本 裕訳	¥3000
庭とエスキース 奥山淳志	¥3200
ファンタジア ブルーノ・ムナーリ　萱野有美訳	¥2400
科学者は、なぜ軍事研究に手を染めてはいけないか 池内 了	¥3400

みすず書房 営業部だより

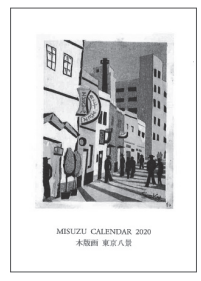
昨年五月に小社より刊行した**小堀鷗一郎『死を生きた人びと』**（第67回日本エッセイスト・クラブ賞受賞）がロングセラーになっています。その小堀先生のTVドキュメンタリーが今度は映画になりました。タイトルは「人生をしまう時間（とき）」。21日（土）から東京を皮切りに、全国各地で公開予定です。詳細は映画の公式ウェブサイトにてご確認ください。

八月の長崎原爆忌を前に刊行した**スーザン・サザード『ナガサキ』**（本紙二面下に広告）が、長崎新聞に大きく紹介された著者インタビューをはじめ朝日、日経、北海道、西日本新聞各紙の書評にとりあげられ、また共同通信配信の書評が河北新報ほか各地の新聞に掲載されて、たちまち三刷となりました。著者サザードさんは十一月に来日し長崎原爆資料館にて講演、長崎原爆死没者追悼平和祈念館では朗読会が開催される予定です。

みすず美術カレンダー2020のご案内

テーマは「木版画　東京八景」です。東京駅、芝浦のハネ橋、新宿のカフェ、神宮球場など、昭和初期の東京の風景をお楽しみいただきます。

恩地孝四郎、前川千帆らの創作版画家によって刊行された『新東京百景』の中から八点を選びました。この書は、関東大震災の被害から復興を遂げる都市風景の移り変わりを伝えようと、東京の新しい風景を木版画に定着し、市民を勇気づけたといいます。オリンピックを迎える年、清涼感に富む東京の風景をぜひ再発見してください。



ハガキ大七葉にポストカード一枚付、ペーパーケース入、卓上用です。ご希望の方は、一部六三〇円に送料を合わせた**計七二〇円**分の**切手**をご同封のうえ、みすず書房営業部（〒113―0033東京都文京区本郷2―20―7）までお申し込みください。複数のご購入については営業部（電話03―3814―0131）までお問い合わせください。書店店頭でもご注文になれます。（十月中旬発売予定）